

最優秀賞(中学生の部)

じいちゃんの石

いわき市立小名浜第一中学校 三年 坂神 怜花

先日、テレビで海上自衛隊の南極観測船「しらせ」の特集番組が放送されていました。南極の昭和基地に向かう四ヶ月間を出港から到着まで密着取材した内容を放送していました。それを母は録画して真剣に見ていました。それは母の父、すなわち私の母方の祖父が、かつて南極観測船に乗り、二度ほど南極へ行っていたことがあるからです。

私の家の玄関には「南極の石」が飾ってあります。祖父が南極からお土産に持ち帰ったものらしいです。私と妹は小さい頃から「じいちゃんの石」と呼んでいます。祖父は三十年以上前に亡くなっています。だから私は、会ったことがありません。「小さい頃ね、南極の話がたくさん聞いたのよ。ペンギンの話や南極の夏の沈まない太陽のこと、途中で立ち寄った国の事とか……。」と、母は話し始めました。番組を見ながら母は記憶をはめこんで、祖父を思い出していたのでしょう。「お父ちゃんと一緒に見たかったな。もっともっと話を聞きたかったな。大人になった今、いっぱい話を聞きたかったな……。」と、母がつぶやきました。母のいろんな思いがつまっていて、私は、「そうだね、私も聞きたかったな。」としか言葉を返せませんでした。母が高校三年生の秋に、祖父は病に倒れ、余命の宣告を受けたそうです。大学受験を控え将来の夢や目標もあった母ですが、地元で就職し、残りの時間を祖父のそばで過ごすことを決めたそうです。「将来が思い通りにいかなくて、ひねくれた時期もあったけど、あの選択は今でも間違えていなかったと思うよ。」と母は言います。余命三ヶ月の宣告だった祖父は、二年二ヶ月闘病し、母が二十歳の時に亡くなったそうです。

私は今、いわゆる反抗期の真っ最中で、特に父との関係がうまくいきません。話かけられても返事もそっけなくしかできず、会話が続くことも少ないです。父なりに気を使って接してくれているのを感じながら、素直に話すことができません。思春期だから、反抗期だから、みんなそうだから、そんな理由をならべてばかりいます。そんな中、あまりに父への態度が悪い時に母に怒られたことがあります。「親がいつまでも元気でいると思うから、そんな態度ができるのだと思うよ。明日、一年後、三年後、お父さんがいなかったらって考えてみなさい。きっともう少し優しい気持ちで話せるようになると思うよ。家族で過ごせる時間って思っているよりずっと短かったりするのよ。」と母は言いました。私はその時ですら、反抗的な態度をとりました。そんな先のことを言われても今は分かるわけないと、そう思ったのです。しかし、考えてみると、祖父が余命宣告をされた時の母の年齢は、私よりほんの三つ年上だけで、今の私が想像できない未来ではないわけです。そして父や母の年齢は、祖父が病気になる年齢とそう変わりありません。私にも起こり得ない話ではないというわけです。「じいちゃんが病気になるってからは、あと何日、いや、あと何時間一緒にいれるだろうと毎晩考えて眠れなかった。」と母が言っていました。想像してみました。すると涙ができました。悲しくなってしまう、母の布団にもぐっていき一緒に寝たくくなりました。

小学校高学年から、私が家族と過ごす時間は減っていきました。友だちとの時間や一人の時間が欲しくて家族がそろるのは夕飯の時間だけになりました。中学に入ると、部活や塾の時間があり、夕食も別にとるようになりました。今では家族そろっての夕食は月に数回ほどです。すると「みんな食べるのは久しぶりだね、なんだか楽しいね。」と父が言います。そんな時の父は、うるさいくらいおしゃべりです。

願わくは遠い将来、今の母と同じように父を思いだす時、私は何を思うのでしょうか。久しぶりの家族揃っての夕食に嬉しそうな顔をする父でしょうか。それとも小さい頃に公園で自転車を教えてくれた父、お祭りの帰りに肩車をしてくれた父なのでしょうか。そんなことを考えるようになり、毎日とは言えないですが、父と以前よりは普通に関われるようになりました。すっかり仲良く、とまでは言えないところは、まだまだ反抗期の真っ最中というところです。

こんな私ですが、玄関にある「じいちゃんの石」を見る度に、両親がいつまでも元気でいてくれますように、と願っているのです。